

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：34105

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13787

研究課題名（和文）従業員の時間展望と意思決定に関する探索的研究

研究課題名（英文）The exploratory research on employees' time perspective and their decision-making

研究代表者

余合 琴絵（小西琴絵）（Konishi, Kotote）

鈴鹿大学・国際地域学部・講師

研究者番号：30781489

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、多様化が進む人材のマネジメントや従業員のメンタルヘルス対策などとしての新しい提案を行うために、個人が感じる時間認識（＝時間的展望）に着目し、個人の持つ時間的展望の違いと、彼らの組織内における行動（態度）や意思決定との関係性について理論的・実証的に明らかにしていくことである。

研究の結果、複雑なライフイベント（例えば就職活動や出産・育児の経験など）に遭遇した際の行動が個人の時間展望の違いによって異なっていたり、ライフイベントを通じて成人の時間的展望が変化（発達）したりすることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

経営学において個人がどの様に時間を認識しているかについては、経営上の意思決定とは関連性が薄く、個人にとっては重要であったとしても、職業上の進路決定や仕事行動との規定要因として考慮されてこなかった。しかし、本研究を通じて従業員の持つ時間展望の違いが、彼らの意思決定や行動に影響を及ぼすことが示された。そのため今後さらに多様化が進む人材のマネジメントや従業員のメンタルヘルス対策として従来とは異なる視点から提案が可能となり、企業社会全体に対する実践的貢献を果たす可能性が高いといえよう。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to focus on time perception that individuals feel, in order to make new proposals for management of increasingly diverse human resources and mental health care for employees.

As a result of this research, we were found that the behavior when encountering complex life events (e.g., job hunting, childbirth, childcare, etc.) differs depending on the difference in the individual's time perspective, and that the adult's time perspective might change through the difficult life events

研究分野：経営学

キーワード：時間的展望 キャリア 意思決定 ライフイベント

1．研究開始当初の背景

近年の日本には、「将来に希望がない」「希望が持てない」という若者が増えている。東京大学社会科学研究所による「働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査」では、若年層（20～39歳）を対象にして、「将来の自分の生活・仕事に希望があるか」について、継続的に調査を行ったが、自分の生活や仕事に希望があると答える割合が、2007年には55%だったのが、2014年の調査では37%にまで下がっている。一般に希望とは、未来に対する明るい見通しと、その見通しのために信頼して行動するという認知と態度の両側面を示している。つまり、現代の若者は自分の仕事を通してよい見通しを持っておらず、自分の信念をもって将来のために行動することが出来ていないということになる。

この原因の一つとして、1990年代のバブル経済の崩壊や2008年のリーマンショックを契機とした長期不況が考えられる。当時の企業は、業績不振を理由として、雇用調整や人件費の削減に取り組み、終身雇用制や年功制といった日本独特の雇用制度に大きな変化をもたらした。この様に経済情勢も雇用状況が大きく変化する中で成長してきた現代の若者は、働くことや将来に対して希望が持てなくなってきたと考えられるのである。

従来の社会科学においては、人が将来に希望をもち、その希望を実現するために行動するとことが、行動分析の基本的な視座となっていられると言われている（玄田，2010）。企業の行う様々な施策についても、その施策の対象となる従業員が「希望を持っている」「前向きである」ことを前提としていられると考えられる。例えば、企業は従業員の成長が将来組織へ還元されることを期待して多くの時間と資金を人材育成に投資する。これは、将来的に従業員が企業の利益のために働いてくれることを期待しているからである。この前提は、従業員が学ぶことや成長することによって物質的・精神的な見返りを得られることを期待するために成立するといられる。しかし現代の若者のように、将来に対して希望を抱きにくくなっている世代にとっては、企業が考えている前提が崩れつつあるのである。

このような従業員側の変化に企業が対応していくためには、企業が抱く従業員像として「将来へ希望を抱いている」といった楽観的なものの見方だけ前提にするのではなく、これまでの職業経験から抱いた過去への認識や、未来に対して希望を抱いているのか否かなど、過去の回顧や未来への展望といった個人の持っている時間認識の違いを、楽観的・悲観的な両面から考察し、例に挙げた人材育成を含む様々な人事施策に生かしていく必要があると考えられる。

【引用・参考文献】

東京大学社会科学研究所(2014)『働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査 2013』

<http://csrda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/PR/13PressRelease.pdf>（2023年6月30日閲覧）

玄田有史（2010）『希望のつくり方』岩波新書。

2．研究の目的

本研究の目的は、本研究の目的は、近年多様化が進む人材のマネジメントや従業員のメンタルヘルス対策などに対して新しい角度から提案を行うために、個人が感じる時間の認識（＝時間（的）展望）に着目し、個人の持つ時間（的）展望と、彼らの組織内における行動（態度）や意思決定との関係性について理論的・実証的に明らかにしていくことである。

経営学において、「時間の認識」については、それがあまりに普遍的な観念であったために、議論の中心として考えられることはなかった（高橋，2016）との指摘もあるが、学問の発生当初から時間の認識は組み込まれていた。例えば科学的管理法における時間は、作業の単位や仕事の効率性を判断する要因として、経営現場での意思決定に用いられてきた。しかし、個人がどの様に時間を認識しているかについては、経営上の意思決定とは関連性が薄く、個人にとっては重要であったとしても、職業上の進路決定や仕事行動との規定要因として考慮されることはなかった。

この個人の時間認識と意思決定との関係性に関する研究は、教育心理学や臨床心理学の分野において「時間展望」という概念のもと研究が進められてきた。時間展望とは、Lewin（1951）が「ある一定の時点における個人の心理的過去及び心理的未来についての見解の総体（邦訳 86頁）」と定義した概念である。そして、この個人の時間展望の違いは、その人のやる気との間に親密な関係があることを示したのである（Lewin，1951）。

この知見を、従業員の心理的側面と行動的側面の関係性についての研究を深めてきた人的資源管理論や組織行動論の研究分野の研究に当てはめると、組織に属する人々がとる行動や意思決定の差異を説明するために、個人の時間感覚の違いを示唆することが出来る（例えば、組織コミットメント、モチベーション、心理的契約、組織社会化など）。しかし、これまでの研究において、個人の時間認識の違いと彼らの態度や意思決定の関係性について明示的に検討している研究は多くないのが現状である（Ancona et al., 2001; George & Jones, 2000）。

この点をふまえ、本研究の目的は、経営学、特に人的資源管理論やにおいて、従業員の意思決

定や行動との関係性を明示されることの少なかった時間展望概念を、理論的・実証的に検討する点である。また、従業員の持つ時間展望の違いが、彼らの意思決定や行動に影響を及ぼすことが明確に示すことができれば、今後さらに多様化が進む人材のマネジメントや従業員のメンタルヘルス対策として新しい提案ができると考えており、企業社会全体に対する実践的貢献を果たす可能性が高い点についても言及できると考えている。

【引用文献】

Ancona, D.G., Goodman, P.S., Lawrence, B. S., and Tushman, M. L. (2001) "Time: A new research lens." *Academy of Management Review*, 26, 645-663.

George, J.M., and Jones, G.R. (2000) "The role of time in theory and theory building." *Journal of Management*, 26, 657-684.

Lewin, K. (1951) *Field Theory in Social Science*, Harper and Brothers. (猪俣佐登留訳『社会科学における場の理論』誠信書房, 1956年。)

Zimbardo, P. G., and Boyd, J. N. (1999) "Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric." *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1271-1288.

高橋 潔 (2016) 「仕事の時間軸」『国民経済雑誌』第213巻第6号, 29-40頁。

都筑 学・白井利明 (2007) 『時間的展望研究ガイドブック』ナカニシヤ出版。

3. 研究の方法

本研究では、文献研究、仮説構築、仮説に基づいた本調査、研究成果のまとめという4つ段階に分けて実施される予定である。

まず文献研究では、これまでの時間的展望に関する研究蓄積が豊富な教育心理学や臨床心理学、経営学分野では特にキャリア論、産業組織心理学分野を中心に調査を行い、この調査の知見を用いて仮説構築が行われる。本調査では、企業で働く従業員への質問紙調査を想定しており、この本調査を出来るだけ大規模に行うことで分析結果からの示唆をより一般化したいと考えている。

4. 研究成果

文献調査と質問紙調査の結果から、ライフイベント(例えば就職活動や出産・育児の経験など)に遭遇した際の行動が、個人の時間展望の違いによって異なっていたり、ライフイベントを通じて成人の時間的展望が変化(発達)したりすることが明らかとなった。

一般的に時間的展望は生まれながらにして個々人が持っているものではなく、認知的能力、特に論理的思考の発達に支えられながら、発達していくと考えられている。つまり、「成長」「過去」「現在」「未来」という時間の認識が明確化することで、時間的展望を持つようになり、心身の発達と共に時間的展望も発達していくのである。そして、発達を促す要因として強く影響を及ぼすものに「ライフイベント」が挙げられる。ライフイベントとは、人が生きていく上で起きる出来事のうち、人生への影響力が大きい出来事(例えば、入学卒業、就職や転職、結婚、出産や子育て、介護、死(死別)など)のことを指す。青年期(特に後期)は、認知発達に支えられながら、進学、就職、結婚といった関心事を持つ文脈によって未来展望が広がる時期である(都筑, 1999)。またそうした未来展望の広がりから、アイデンティティ形成などこの時期の発達にとって重要であることが示されてきた(都筑・白井, 2007)。続く成人前期(20-39歳)は、就職や結婚、出産や育児などの自身で意思決定を行わなければならないライフイベントと遭遇する機会がほかの世代よりも多い。この世代は、青年期から引き続き、未来への展望の拡大期である。しかし、未来への希望を抱きやすいと同時に、人生で初めて遭遇する様々なライフイベントに戸惑い不安を感じる世代である(白井, 1997)。

これらのことを踏まえて、就職活動を控えている大学生約1300名と一般企業で働いている社会人約1600名に質問紙調査を実施した結果、大学生では時間的展望の違いによってインターンシップの参加傾向が異なる点や内定取得傾向が異なることが分かった。さらに社会人では育休を取得した経験のある人の方が、経験のない人と比較して、将来に関する時間的展望を持ちやすく、仕事経験するストレスに対する耐性(レジリエンス)が高いことが分かった。

以上の研究成果の詳細については、すでに学会発表やポスター発表において公開されている。またこれ以外にも、研究成果をさらに取りまとめた上で、学術雑誌や学会発表での報告として今

後順次公表されていく予定である。

【引用文献】

白井利明（1997）『時間的展望の生涯発達心理学』 勁草書房。

都筑 学（1999）『大学生の時間的展望 構造モデルの心理学的検討 』 中央大学出版部。

都筑 学・白井利明（2007）『時間的展望研究ガイドブック』ナカニシヤ出版。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小西 琴絵（鈴鹿大学） Hoang Mai Huong（ハノイ貿易大学） 鈴木 智之（名古屋大学）
2. 発表標題 就職活動経験に着目した日本人大学生と外国人大学生の時間的展望意識 ZTPI(Zimbardo Time Perspective Inventory)を用いた国際比較研究
3. 学会等名 日本労務学会中部部会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小西琴絵
2. 発表標題 時間的展望を形成する要因に関する考察 ライフイベントの影響に着目して-
3. 学会等名 立命館大学大学院人間科学研究科研究発表会 2021年12月
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小西琴絵
2. 発表標題 変化する時間的展望に関する一考察 -出産・育児の経験に着目して-
3. 学会等名 立命館大学大学院人間科学研究科研究発表会 2022年7月
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小西琴絵
2. 発表標題 インターンシップ経験と時間的展望の違いに関する考察
3. 学会等名 立命館大学大学院人間科学研究科研究発表会 2022年12月
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------